

第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 銀賞

慶應義塾中等部 2 年

石川 怜奈

課題①

本年は SDGs の中間年。2030 年までに 17 の国際目標から成る SDGs を全て達成するために、日本ができることは何か。

副題

一人百円で世界が変わるとしたら

私は無力です、何者でもありません。

でも私は何者にもなれます。何者でもない私たちが団結すれば世界は変えられます。

二〇二三年、何者でもない一人が世界を変えた。その何者かに私はなります。

私が SDGs を知ったのは小学校六年生の授業です。SDGs は二〇三〇年までに達成すべき目標、その実現はあまりにも厳しい。今この瞬間も戦争や飢餓で命を落としている人がアジアやアフリカなど発展途上国にいます。私は小学校低学年の頃、ロンドンに住んでいた日々を思い出しました。様々な理由で祖国から遠く離れたイギリスで生活しつつも、祖国を心配するクラスメートがいたことを。

激しい怒りをおぼえました。何をすべきかの議論を終わらせ、行動に移すべきです。今でも、水やトイレ、教育などが全ての人に提供されていないのが現実です。

怒りと共に絶望感をおぼえました。SDGs の十七の目標は二〇三〇年までに必達なのに、政府や国際機関は有効な対策を打たず、我々の世代も危機感が足りません。私は SDGs を達成できるか友達と議論をしました。しかし、危機感を共有できませんでした。このことにも衝撃をおぼえました。

二〇五〇年の地球は今の私たちの行動で変わります。そして、その時に世界のリーダーである私たちの世代は今、自分たちの未来を決められるのです。

私は国連で働いて気候変動を解決したいと考えています。しかし、私が働けるのは十年後の二〇三三年以降です。その時には SDGs が達成されてなければならないのです。

今の無力な私ができることは何か。危機感を同年代の仲間と共有し行動を起こすことが重要だと考え、「ジュース一本で日本を変える」という企画を考えました。

なぜ SDGs を達成する取り組みを本格化できないのだろう。それは我々が現状維持を優先した結果なのでしょう。今の生活が快適だから、それを犠牲にして環境を守ろうという運動には消極的になるのだろう。人類が直面している危機を前に、私たちは問題から逃げている場合ではないのです。

しかし希望はあります。例えばアメリカのパタゴニアというブランドが、消費者に「我が社の商品を買わないで」というメッセージを打ち出し、「新しいものを買わず、修理し使い続けることがクールな

消費者である」と訴えました。これに世界の人々は惹きつけられました。私は全ての会社がこのような理想を掲げることが SDGs 達成の鍵になると考えました。

私が考えた企画を紹介します。日本の中高生から一人百円、ジュース一本分のお金を集めます。日本の中高生は六百万人、ジュース一本を我慢し百円出せば、六億円集まります。この資金で大企業の株を買います。お金儲けが目的ではありません。株主提案します。

例えばユニクロには、リサイクルを増やすため新しい服を買うとき自分が使った服を持ってくれば値段を安くする、という案を株主として提出します。企業側は、十年後には顧客か従業員になるであろう六百万人の意見を無視することはできないでしょう。他にも、ANA には温室効果ガスの排出量が少ない燃料に変えるよう提案し、東京電力には再生可能エネルギーを抜本的に増やすよう提案し、MUFG には再生可能エネルギーなど SDGs 達成に貢献する融資を増やすよう提案します。日本の企業がより SDGs 達成に積極的になれば、日本の政府も必ず動きます。一つの国が SDGs を達成できれば、必ず世界中に広がります。

前例がないからやろうとしない、ならば自分が最初の例になればいいのです。

何者でもない私たちが世界を変えた。

百円玉と強い気持ちが世界を変えた。

SDGs は達成できる。私たちの力で。